

『キャスターという仕事』

2017年02月11日

NHKの「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷裕子氏が『キャスターという仕事』を上梓している。降番直後、2016年5月号の岩波の月刊誌『世界』に、同じタイトルで寄稿していた。今回新書化して、23年間、果敢に挑戦してきた日々を縷々語っている。「クローズアップ現代」は、直近の問題をクローズアップし、深く掘り下げて報道したNHKの看板番組で、私もよく観た。この本を読み、漫然と観ていたが、キャスターの苦勞を改めて知らされた。アナウンサーは原稿を読むだけであるが、キャスターは自分の言葉を持って、出来事と視聴者を結びつけるように解説する。そこでは、キャスターの資質、姿勢が表れる。放映した3,786本から80本について語っていた。その語りから、23年間の世界と日本の動きを振り返る機会となった。ソ連の崩壊によって米国一強時代になり、9・11の同時多発テロから、アラブ世界は混沌となった。その余波は深刻な争いを招き、難民は溢れ、ヨーロッパ諸国は混乱している。日本は終身雇用制度が崩れ、グローバル化が職業形態を変え、貧富の格差が増大した。イギリスはEU（ヨーロッパ連合）から離脱し、米国はトランプ大統領が就任し、時代は大きく変容している。彼女は、オックスフォード辞典が、この年の言葉として「ポスト真実」を選んだように、時代は混迷を深め、上辺だけの言葉やニセ情報が氾濫しているけれども、女性の社会参加が成長の鍵になると、彼女らしい視点で、希望を語っている。

国谷氏はジャーナリストとして、ニューヨークタイムズ紙の記者ハルバースタム氏の警告を心に刻んでいる。彼はベトナム戦争取材しピューリッツァー賞を受賞したジャーナリストで、次のように語っている。「テレビが私たちの知性を高め、私たちをより賢くするものなのか、それとも、派手なアクションを好み、娯楽に適しているというその特性ゆえに、真実を歪めてしまうものなのか、ということ。」テレビがエンターテインメント化し、真実を伝えないことを警告している訳である。この警告はテレビを観る私たちへの警告でもある。彼女はテレビの三つの危うさを心に留めている。①「事実の豊かさを、そぎ落としてしまうという危うさ」②「視聴者に感情の共有化、一体化を促してしまうという危うさ」③「視聴者の情緒や人々の風向きに、テレビが寄り添ってしまうという危うさ」。①は「分かり易く」単純化することによって、出来事の豊かさ、多様性をそぎ落としてしまう危険性である。②③は、シンプルな表現が視聴者の情緒に結びつき、報道側と視聴側の感情が同化し、迎合し合い、異質性を見逃してしまうという落とし穴である。

「クローズアップ現代」は生（ライブ）のインタビューが多かった。彼女は「聞く（ヒア）」と「聴く（リッスン）」の違いを述べている。相手の話の委細を注意深く聴く、リッスンする力は大切だが、その人全体から発するメッセージを丁寧に聞く力を見失ってはならない。高倉健にインタビューした時、17秒も沈黙が続いた。その沈黙の後で、無口な彼は語り始めたという。インタビューは人格が発するものを引き出すのである。

最後に、「時代に個人が翻弄されるなかで、一人ひとりが将来を考え、自分の生き方を選択していくためにも、長期的で多角的な情報を得て、自分の置かれた立場を俯瞰することが必要になっている。その必要に応じていくことが、テレビの報道にいま求められている」と語っている。彼女の高い知性、フェアであろうとする誠実さ、鋭く問い続ける勇氣、そして、人間に対する深い愛に感銘を受けた。彼女に一貫して流れているものは「言葉の力」を信じる姿勢である。ポスト真実と言われる時代、取り戻したい「力」である。